

結果補語と意味指示

—述語論理による結果補語の意味研究—

加 藤 宏 紀

0. はじめに

結果補語は現代中国語（以下中国語とする）において重要なテーマの一つである。したがって、それに関するこれまでの研究は数多い。とりわけ近年では、意味に重点をおいた研究が盛んになりつつある。その一例が马真、陆俭明 (1997) である。そこでは「意味指示 (马、陆文では“语义指向”）」の観点から形容詞の結果補語についての意味分析を詳細におこなっている。本稿は马、陆 (1997) で分析の基準となっている「意味指示」について、述語論理を用いて論じる。

なお、本稿は論者の修士論文「現代中国語の結果補語構文の意味研究」の一部を加筆、修正したものである。

1. 意味指示

本稿で取りあげる「意味指示」について、马、陆 (1997) ではそれを「ある統語成分が意味上どの成分と最も直接的な関係を生じるかを指し示すこと」と定義している。具体的に马、陆 (1997) が挙げた例を用いて説明しよう。次の例 (1) は述語動詞“扔 [投げる]”と方向補語“进去 [入っていく]”が結びついた動詞方向補語構造である。

(1) (把球) 扔进去 [(ボールを) ほうり込む] (马、陆1997)

中国語文法では、「補語は述語を補足的に説明するものであると説明される」(马、陆 (1997))。すなわち、上の (1) では、統語上方向補語“进去”は

述語動詞“扔”と直接結びついている。ところが、馬、陸(1997)によれば「補語“进去[入って行く]”は意味の上から言って，“扔”という動作を直接説明するのではなく，“扔”の受け手“球[ボール]”の位置の移動方向を説明」しているのである。すなわち，“进去”は“扔”と意味上直接は結びつかずに，“球”と結びついている。

こうした補語の意味指示は、馬、陸(1997)以外の研究でもたびたび指摘されている。たとえば、劉月華ほか(1983)や李臨定(1991)では「この種の結果補語は『人』かあるいは『事物』を説明する」(劉ほか1983:330)や「補語が主語を説明している」(李1991:169)のようにである。ただしそこでは「意味指示」ではなく「説明」という言い方をしている。

これらの研究では「意味指示(あるいは「説明」)」を補語の分類の根拠ないし分類された補語が持つ特徴として用いているだけである。本稿ではもう一步踏み込んで、意味指示すなわち文中のある成分がほかのどの成分と直接の意味関係を生じるかを指摘すること自体にどのような意義があるかを明らかにしたい。

以上で意味指示とは何かについての説明を終わる。

2. 述語論理

本稿では述語論理を用いて意味指示という現象に対して考察する。意味指示に対して述語論理を採用する理由は、要点をかいつまんで言えば次の三点を挙げることができる。第一点は述語論理学は文中の成分間の意味関係を記述することができるということである。第二点は述語論理では、文中の意味上の主要成分が論理上の述語になれるということである。第三点は述語論理が普遍的な表現方法としてのメタ言語として機能するというということである。

ここでは、本稿で必要な述語論理に関する基本的な概念について説明する。次の(2)は「彼はかしこい」という意味の中国語の文である。(2)において、“他[彼]”は主語であり，“聪明[かしこい]”は述語である。

(2) 他聪明。[彼はかしこい。] (徐1995)

上の(2)を述語論理で表すと、次の(3)のようになる。(3)において、「C」は(2)の“聪明”に相当し、丸括弧内の「a」は(2)の“他”に相当する。述語論理学では、(3)の「C」を「論理述語 (logical predicates)」, 「a」を「個体定項 (individual constants)」と呼ぶ〔注1〕。

(3) C (a)

ここで注意しておかなければならないのは、(3)は(2)の単なる置き換えではないということである。(3)は(2)が表す意味内容を一般的な仕方で記述しているのである。つまり、日本語の「彼はかしこい」という文の意味内容も、英語の「He is clever」という文の意味内容も(3)によって表すことができるのである。

では、(3)のような述語論理によって表される「意味内容」とは何であろうか？ 述語論理は主に論理述語と「個体 (individuals)」によって構成される〔注2〕。述語論理の意味内容はこの二つの要素によって表される。まず、「個体」について考える。「個体」は大きく分けて二種類あるが、その区別は先送りにして、ここではひとまとまりとして捉えておく。「個体」にはこの世界上のあらゆる事物に限らず、感覚的に捉えることのできるものがすべて含まれると考える。つまり、人や動植物などの物体は言うまでもなく、その部分である手足や葉や根などもまた「個体」である。そして、人の心やその中に存在する事物なども「個体」と考えるのである。(3)で言えば、個体定項「a」は「彼」という個体を表している。

次に、論理述語について考える。言語学上の述語は通常動詞及び形容詞によって担われ、「個体」が立っている関係や「個体」が持っている性質を記述する。たとえば、“打[殴る]”という中国語の動詞は二つの個体に成り立っている「関係 (relations)」を表す。また、“红[赤い]”という中国語の形容詞はある個体が持っている「性質 (properties)」について述べている。通常、

個体が持つ性質を「属性」と呼ぶ。(3)で言えば、論理述語「C」は「かしこい」という属性を表している。

以上の個体と論理述語の関係から、述語論理によって表される意味内容は何らかの個体がたっている関係や個体が持っている性質についての記述であるといえる。したがって、上の(3)の述語論理式によって表される意味内容は、「彼という個体がいて、その彼がかしこいという属性を持っている」というものである。

これまでの説明で、述語論理によって示される意味内容とはどのようなものであるか明らかになったことと思う。そこで、上で先送りにした二種類の個体の問題に立ち帰ることにする。二種類の個体の一つは前出の個体定項であり、もう一つは「個体変項 (individual variable)」である。

個体定項は、記号によって示される個体が具体的な指示物のあるものである。上の(3)で言えば、個体定項「a」は「彼」という具体的な指示対象がある。

もう一方の「個体変項」について説明する。「個体変項」は、記号によって示される個体の指示対象がないということを表す。言い換えると、それはどのような個体も表すことができるということである。

この「個体定項」と「個体変項」の二種類の個体の性質の違いは重要である。それらの性質の違いは上の(3)と次の(4)の述語論理式が表す意味内容において明らかになる。(4)において、丸括弧内の「x」は個体変項を表す。

(4) C (x)

(3)の述語論理式とことなり(4)の述語論理式はいかなる命題も表さない。具体的に言うと、(3)は「彼はかしこい」という命題を表す。一方、(4)は「xはかしこい」のように読むことはできるが、それは命題ではない。なぜなら、それは「真理値 (truth-value)」を持たないからである。真理値を持つとはどういうことであろうか？真理値というのは、ある文や命題がその論議の対象となる領域の範囲において、正しい陳述であるかどうかを定めるものである。

もし、正しい陳述であれば「真 (true)」であるし、逆に間違った陳述であれば「偽 (false)」である。したがって、真理値を持つということは、(3) のような述語論理を用いて表示された文やほかの自然言語を用いて表された文が実際の世界と結びつけることが可能であるということの意味する。たとえば、(3) の命題に関して、それによって陳述されている内容は必ず真かまたは偽である。すなわち、彼がかしこければ真であるし、かしこくなければ偽である。ところが、(4) が表す意味内容について、それが真であるかと質問してみたところでその真偽は判定できない。なぜなら、その真理値は「x」がどのような個体であるかによって決まるからである。このように、個体定項と個体変項の性質の違いはそれらを持つ述語論理式の性質に直接影響する。

では、(4) のような個体変項を持つ述語論理式が真理値を持つためにはどうしたらよいのであろう？それは、個体変項xを個体定項に換えることで可能となる。すなわち、言語表現によって表される現実世界の対象物を指示するのである。このことを個体定項の個体変項への「割り当て (assignment)」と呼ぶ。

以上、本章では述語論理の基本的な概念について説明した。これで述語論理についての説明を終わる。

3. 結果補語と意味指示

馬、陸 (1997) では、形容詞が結果補語の意味指示について体系的に考察し、十種類の状況にまとめている。以下では馬、陸 (1997) の例文に基づいて、論者による述語論理による詳細な説明を行う。なお馬、陸 (1997) では述語論理については言及されておらず、述語論理による説明によって生ずる問題の責任はすべて論者のものである

3.1 結果補語の意味指示と述語論理

以下本章では馬、陸 (1997) に挙げた例にそくして、結果補語の意味指示について述語論理を用いて意味分析をする。そこで、なぜ述語論理を用いる

のかについてももう少し詳しく述べる。

第一に、述語論理はひとつの文中で成立する論理的関係を考察するものだからである。すなわち、文中のある成分がほかのどの成分と意味関係を生じるかを明らかにするのである。よって、述語論理を用いると動詞結果補語構造(以下、VR構造)文における結果補語がほかのどの成分と直接の意味関係を生じるかを明示できるということになる。

第二に、述語論理ではひとつの文中で最も重点的に表現したい部分(情報)が論理述語となるからである。VR構造において、結果補語は意味上の主要部すなわち、文中で最も重点的に表現したい部分(情報)である。したがって、結果補語が表す意味内容を論理述語として表すことができる。

第三に、述語論理をメタ言語として利用することによって、言語学的に意味のある一般化が可能になると考えるからである。すなわち、結果補語の意味指示という現象を一般的な仕方で記述するのである。これは意味指示という中国語話者の直観に基づく説明を普遍的な説明にすることでもある。なぜなら、述語論理学はあらかじめ規定された意味論を備えていて、それに基づいて説明されるからである。

結果補語の意味指示を明らかにするのに述語論理を用いることは以上のような三つの理由により有効であると考ええる。

3.1.1 結果補語の意味指示対象が「述語動詞の表す動作行為自体」の場合

3.1.1では、結果補語が述語動詞の表す動作行為自体を意味指示する場合について分析する。

馬、陸(1997)では「“来早了[来るのが早い]”の補語“早[早い]”は意味上、“来[来る]”という動作行為を指示する。すなわち、“早”は意味上“来”を直接説明する」と指摘している。

VR構造において、最も重点的に表現したい部分は結果補語である。だから、“来早了”の結果補語“早”は論理述語になる。論理述語となる“早”は「ある個体についてそれが早いという属性を持っている」ことを表す。このことは、「ZAO(x)」によって表すことができる(以下では、中国語の単

語との混同を避け、述語論理では「ZAO」のように表記する)。「ZAO (x)」の「x」は個体変項 (individual variable) である。この「ZAO (x)」は何かについて記述している文ではない。なぜなら、それは真理値を持たないからである。それから文を作るためには、早いという属性を持つ個体変項「x」に個体定項 (individual constants) を割り当てればよいのである。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“来早了”は「来るのが早い」という意味を表す文である。それは「来ること」に関して、それが「早い」という属性を持っていることを記述している。よって、意味上「来ること」は「早い」という属性を持つ「個体」ということになる。つまり、個体変項「x」に「来ること」という意味内容を表す個体定項が割り当てられる。この「来ること」は文中で述語動詞“来”によって表されている。注意しなければならないのは、“来早了”の“来”は構造上述語動詞として形式的主要部となっているが、意味の上では主要部ではないということである。つまり、“来”は「来る」という動作そのものを表すのではなく、「来ること」という個体化された動作を表す。このことを「LAI ϕ 」で表記しよう。「 ϕ (ファイ)」は「LAI」が意味上個体化されていることを表す。個体定項が割り当てられた述語論理式「ZAO (LAI ϕ)」は文である。当然のことながら、同時にそれは“来早了”と同じ意味内容を表す。したがって、馬、陸 (1997) が指摘する「結果補語“早”が述語動詞“来”を意味指示する」という現象は、「ZAO (x)」の個体変項「x」に個体定項「LAI ϕ 」を割り当てることと平行であるといえる。ゆえに、結果補語の述語動詞自体への意味指示は「R (V ϕ)」のように一般化できる〔注3〕。「R (V ϕ)」において、「R」は結果補語を表し、「V」は述語動詞を表す。以上、3.1.1では結果補語が述語動詞の表す動作行為自体を意味指示する場合について分析した。

3.1.2 結果補語の意味指示対象が「述語動詞の表す動作行為の動作主」の場合

3.1.2では結果補語が述語動詞の表す動作行為の動作主を意味指示する場

合について分析する。

马、陆 (1997) では「“写累了[書き疲れた]”の補語“累[疲れている]”は意味上，“写[書く]”の動作主を指示する」と指摘している。

VR構造“写累了”において、意味の重点は結果補語“累”にある。それゆえ，“累”は論理述語となる。論理述語はある個体についてそれが持っている属性を記述する。よって，“累”は「ある個体についてそれが疲れているという属性を持っている」ことを表す。それは、「 $LEI(x)$ 」と表記できる。しかし、これは文ではない。なぜなら、論理式が個体変項「 x 」を持っており、真理値を持たないからである。それを文にするためには、「疲れている」という属性を持つ個体変項「 x 」に個体定項を割り当てればよいのである。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“他写累了”は「彼は書き疲れた」という意味の文である(ここでは便宜上動作主“他[彼]”を明示して説明する)。すなわちそれは「彼」という個体について、それが「疲れている」という属性を持っていることを記述している。よって、「彼」は個体変項「 x 」に割り当てられる個体定項となる。個体定項として割り当てられる「彼」は、文中において「書く」の動作主(agent)である。このことを「 $XIEagent$ 」と表記する。個体定項が割り当てられた述語論理式「 $LEI(XIEagent)$ 」は文である。また、同時にそれは“他写累了”と同じ意味内容を表す。したがって、马、陆 (1997) が指摘する「結果補語“累”は述語動詞“写”が表す動作行為の動作主を意味指示する」という現象は、「 $LEI(x)$ 」の個体変項「 x 」に個体定項「 $XIEagent$ 」を割り当てることと平行であるといえる。ゆえに、結果補語の述語動詞の動作主に対する意味指示は「 $R(Vagent)$ 」と一般化できる。以上、3.1.2では結果補語が述語動詞の表す動作行為の動作主を意味指示する場合について考察した。

3.1.3 結果補語の意味指示対象が「当事者の人体器官又は人体のある部分」の場合

3.1.3では、結果補語が当事者の人体器官又は人体のある部分を意味指示する場合について分析する。

马、陆 (1997) では「“她哭红了眼睛 [彼女は泣いて目を赤らめた]” について、明らかに補語“红 [赤い]” は意味上“眼睛 [目]” を指示するものであり，“眼睛” は“她” の一つの器官である」さらに「“我一句话把妹夫说红了脸 [私の発した一言で義弟は顔を赤くした]” について、この補語“红” は意味上“脸 [顔]” を指示するものであり，“脸” は“妹夫 [義弟]” の人体の一部である」と指摘している。まず，“她哭红了眼睛” について考える。

これまでと同様，VR構造“哭红了 [泣いて赤くなった]” の意味上の重点である結果補語“红” は論理述語になる。これは，「HONG (x)」のように表すことができる。それは「ある個体が赤いという属性を持つ」ということを表している。しかし，これは文ではない。なぜなら，それは真理値を持たないからである。それが真理値を持つ文になるためには，赤いという属性を持つ個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“她哭红了眼睛” は「彼女は泣いて目を赤くした」という意味を表す文である。それは「彼女の目は泣いて赤くなった」と言い換えることができる。言い換えられた文から，「赤い」という属性を持っている「個体」は「(彼女の) 目」であることが分かる。よって，述語論理上「(彼女の) 目」は個体変項「x」に割り当てられる個体定項となる。個体定項として割り当てられる「(彼女の) 目」は述語動詞「泣く」の動作主の部分 (part) である。このことを「KUagent-part」を表記しよう。個体定項が割り当てられた述語論理式「HONG (KU agent-part)」は文である。同時にそれは“她哭红了眼睛” と同じ意味内容を表す。したがって，马、陆 (1997) が指摘する「結果補語“红” は意味上“她” の一つの器官である“眼睛” を指示する」という現象は，「HONG (x)」の個体変項「x」に個体定項「KUagent-part」を割り当てることとパラレルであるといえる。ゆえに，結果補語が述語動詞の表す動作主の部分を意味指示する現象は「R (V agent-part)」と一般化できる。

次に，“我一句话把妹夫说红了脸” について考える。上の例と同様，VR構造において，結果補語“红” が論理述語となる。論理述語となった“红” は「HONG (x)」のように表される。それは「ある個体が赤いという属性を

持つ」ということを表している。「HONG」という属性を持つ「個体」が不定であるため、それは真理値を持たない。つまり、「HONG (x) 」は文ではない。「HONG (x) 」が真理値を持つためには赤いという属性を持つ個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“我一句话把妹夫说红了脸”は「私の発した一言で義弟は顔を赤らめた」という意味である。これは「私は義弟に一言発すると、彼の顔は赤くなった」と言い換えることができる。すると、「赤い」という属性を持っているのは「(義弟(彼)の)顔」という個体であるということが分かる。よって、述語論理上「(義弟)の顔」は個体変項「x」に割り当てられる個体定項となる。個体定項として割り当てられる「(義弟の)顔」は述語動詞「言う」という動作行為の授与者(dative)の部分である。このことを「SHUOdative-part」と表記する。このように個体定項が割り当てられた述語論理式「HONG (SHUOdative-part) 」は文である。同時にそれは“(我一句话)把妹夫说红了脸”と同じ意味内容を表す。したがって、马、陆(1997)が指摘する「結果補語“红”は意味上“妹夫”の部分である“脸”を指示する」という現象は、「HONG (x) 」の個体変項「x」に個体定項「SHUOdative-part」を割り当てることと平行であるといえる。ゆえに、結果補語が述語動詞の表す動作行為の授与者の部分を意味指示するという現象は「R (V dative-part) 」と一般化できる。以上、3.1.3では結果補語が当事者の人体の器官又は人体のある部分を意味指示する場合について説明した。

3.1.4 結果補語の意味指示対象が「述語動詞の表す動作行為の受け手」の場合

3.1.4では、結果補語が述語動詞の表す動作行為の受け手を意味指示する場合について分析する。

马、陆(1997)では、「“把球压扁了[ボールを押しつぶした]”の補語“扁[つぶれている]”は意味上“压”の受け手“球”を指示しているのである」と指摘している。

VR構造“压扁了[押しつぶした]”において、意味上の主要部である結果補語“扁”が論理述語となる。論理述語は何かについての記述であるので「BIAN (x)」のように表される。それは「ある個体がつぶれているという属性を持つ」ということを表している。しかし、「BIAN (x)」は真理値を持たない。すなわち、それは文ではない。それが文になるには、つぶれているという属性を持つ個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“把球压扁了”は「ボールを押しつぶした」という意味である。これは「ボールは押されてつぶれた」と言い換えることができる。すなわち、意味上「ボール」は「つぶれている」という属性を持つ「個体」ということになる。とすると、「ボール」は個体変項「x」に割り当てられる個体定項となる。個体定項として割り当てられる「ボール」は述語動詞「押す」という動作行為の受け手(patient)である。このことを「YApatient」と表記しよう。個体定項が割り当てられた述語論理式「BIAN (YApatient)」は文である。同時にそれは“把球压扁了”と同じ意味内容を表す。したがって、马、陆(1997)が指摘する「結果補語“扁”は意味上“压”の受け手“球”を指示する」という現象は、「BIAN (x)」の個体変項「x」に個体定項「YApatient」を割り当てることと平行であるといえる。ゆえに、結果補語が述語動詞の表す動作行為の受け手を意味指示するという現象は「R (Vpatient)」と一般化できる。以上、3.1.4では結果補語が述語動詞の表す動作行為の受け手を意味指示する場合について分析した。

3.1.5 結果補語の意味指示対象が「述語動詞の表す行為の経験者」の場合

3.1.5では、結果補語が述語動詞の表す行為の経験者を意味指示する場合について分析する。

马、陆(1997)では「経験者とは非自発的な行為の主体である。たとえば、動詞“变[変わる]”、“长[成長する]”はいずれも非自発的な行為で、その主体が経験者である」として、次のような例を挙げている。「たとえば、“花儿变红了[花は赤くなった]”、“猪长肥了[豚は肥えた]”において、“花儿

「花」”、“猪 [豚]”はそれぞれ“变”、“长”の経験者である」。さらに続けて「補語“红 [赤い]”と“肥 [肥えている]”は意味上それぞれ“变”と“长”の経験者“花儿”と“猪”を指示する」と指摘している。

“花儿变红了”と“猪长肥了”のいずれの文の結果補語も述語動詞が表す行為の経験者を意味指示するので、説明の重複を避けここでは“猪长肥了”について考える。

VR構造“长肥了 [(成長して) 肥えた]”において、意味上の中心である結果補語“肥”は論理述語になる。論理述語は何かについての記述であるので「FEI (x)」と表すことができる。それは「ある個体が肥えているという属性を持つ」ということを表している。しかし、「FEI (x)」は文ではない。というのも、それには真理値を決定することができないからである。「FEI (x)」が文になるには、肥えている属性を持つ個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“猪长肥了”は「豚は成長して肥えた」という意味である。つまり、意味上「豚」は「肥えている」という属性を持っている個体ということになる。よって、「豚」は個体変項「x」に割り当てられる個体定項となる。個体定項として割り当てられる「豚」は「成長する」の経験者 (experiencer) である。このことを「ZHANGexperiencer」と表記しよう。個体定項が割り当てられた述語論理式「FEI (ZHANGexperiencer)」は文である。同時にそれは“猪长肥了”と同じ意味内容を表す。したがって、马、陆 (1997) が指摘する「結果補語“肥”は意味上“长”の経験者“猪”を指示する」という現象は、「FEI (x)」の個体変項「x」に個体定項「ZHANGexperiencer」を割り当てることと平行であるといえる。ゆえに、結果補語が述語動詞の表す行為の経験者を意味指示する現象は「R (Vexperiencer)」と一般化できる。以上、3.1.5 では結果補語が述語動詞の表す行為の経験者を意味指示する場合について分析した。

3.1.6 結果補語の意味指示対象が「述語動詞の表す動作行為をするための道具」の場合

3.1.6では結果補語が述語動詞の表す動作行為をするための道具を意味指示する場合について分析する。

马、陆 (1997) では「“刀砍钝了 [包丁は切れが鈍くなった]” の補語 “钝 [切れが鈍い]” は意味上 “刀 [包丁]” を意味指示していて、……それは “砍 [たたき切る]” をするための道具である」と指摘している。

VR 構造 “砍钝了 [たたき切って切れが悪くなった]” において、意味上の重点である結果補語 “钝” は論理述語になる。論理述語はある個体についての属性や関係を記述する。よって “钝” は「ある個体についてその切れが悪いという属性を持つ」ということを記述している。このことは「DUN (x)」によって表すことができる。しかし、それには真理値を決定することができない。すなわち、それは文ではない。それを命題を持つ文にするためには、個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“刀砍钝了” は「包丁は切れが悪くなった」という意味の文である。これは「包丁」という個体について、それが「切れが悪い」という属性を持っているということを述べている。よって、「包丁」は個体変項「x」に割り当てられる個体定項となる。個体定項として割り当てられる「包丁」は「たたき切る」という動作行為をするための道具 (instrument) である。このことを「KANinstrument」と表記する。個体定項が割り当てられた述語論理式「DUN (KANinstrument)」は文である。また同時に、それは“刀砍钝了”と同じ意味内容を記述している。したがって、马、陆 (1997) が指摘する「結果補語“钝”は……“砍 [たたき切る]” をするための道具である“刀”を意味指示する」という現象は、「DUN (x)」の個体変項「x」に個体定項「KANinstrument」を割り当てることと平行であるといえる。ゆえに、結果補語が述語動詞の表す動作行為をするための道具を意味指示する現象は「R (Vinstrument)」と一般化できる。以上、3.1.6では結果補語が述語動詞の表す動作行為をするための道具を意味指示する場合について述べた。

3.1.7 結果補語の意味指示対象が「述語動詞の表す動作行為の産物」の場合

3.1.7では、結果補語が述語動詞の表す動作行為の産物を意味指示する場合について分析する。

马、陆 (1997) では、「“挖坑[穴を掘る]”の“坑[穴]”は“挖[掘る]”の産物である。“坑挖浅了[穴は浅く掘りすぎた]”の補語“浅[浅い]”は意味上“挖”の産物“坑”を指示するのである」と指摘している〔注4〕。

VR構造“挖浅了[掘って浅すぎた]”において、意味上の主要部である結果補語“浅”は論理述語になる。論理述語はある個体についてそれが持っている属性や関係を記述する。よって、“浅”は「ある個体についてそれが浅いという属性を持っている」ことを述べている。このことは「QIAN (x)」によって表すことができる。しかし、それは真理値を持たない。つまり、それは文ではない。それを文にするためには、個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。以下でどのような個体定項が割り当てられるのかを見る。

“坑挖浅了”は「穴は掘って浅すぎた」という意味の文である。これは「穴」という個体について、それが「浅い」という属性を持っていることを述べている。よって、「穴」は個体変項に割り当てられる個体定項となる。個体定項として割り当てられる「穴」は「掘る」という動作行為の産物 (product) である。このことを「WAp_{product}」と表記する。個体定項が割り当てられた述語論理式「QIAN (WA_{product})」は文である。同時にそれは、“坑挖浅了”と同じ意味内容を表す。したがって、马、陆 (1997) が指摘する「“坑挖浅了”の補語“浅”は意味上“挖”の産物“坑”を指示する」という現象は、個体変項「x」に個体定項「WAp_{product}」を割り当てることとパラレルであるといえる。ゆえに、結果補語が述語動詞の表す動作行為の産物を意味指示するという現象は「R (V_{product})」と一般化できる。以上、3.1.7では結果補語が述語動詞の表す動作行為の産物を意味指示する場合について考察した。

3.1.8 結果補語の意味指示対象が「述語動詞の表す動作行為の動作主かあるいは受け手が存在する場所」の場合

3.1.8では、結果補語が述語動詞の表す動作行為の動作主かあるいは受け手が存在する場所を意味指示する場合について分析する。

馬、陸 (1997) では、述語動詞の表す動作行為の動作主の存在する場所を意味指示する例として、“房间里坐满了人 [部屋は人で満席になった]” を挙げている。

ここでは、動作行為の動作主が存在する場所を意味指示している例について考える。馬、陸 (1997) は「“房间里坐满了人” の“房间里 [部屋の中]” は“人 [人]” の存在する場所である。この文中の補語“満 [いっぱいである]” は意味上“人” の存在する場所を指示するのである」と指摘している。

VR構造“坐满了 [いっぱいに座っている]” において、結果補語“満” は意味上の主要部であり論理述語となる。論理述語はある個体についてそれが持っている属性や関係を記述する。よって、論理述語になる“満” は、「ある個体についてそれがいっぱいであるという属性を持っている」ことを記述している。このことは「MAN (x)」と表記できる。しかし、これは真理値を持たない。すなわち、それは文ではない。それを文にするためには、個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“房间里坐满了人” は「部屋の中は人が座っていっぱいである」という意味の文である。これは「部屋 (の中)」という個体についてそれが「いっぱいである」という属性を持っているということを記述している。よって、「部屋 (の中)」は個体変項「x」に割り当てられる個体定項となる。個体定項として割り当てられる「部屋 (の中)」は「座る」という動作の動作主「人」が存在する「場所 (location)」である。このことを「ZUOagent-location」と表記しよう。個体定項が割り当てられた述語論理式「MAN (ZUOagent-location)」は文である。同時にそれは、“房间里坐满了人” と同じ意味内容を表す。したがって、馬、陸 (1997) が指摘する「“房间里坐满了人” の文中の補語“満” は意味上“人” の存在する場所を指示する」という現象は、「MAN (x)」の

個体変項「x」に個体定項「ZUOagent-location」を割り当てることと平行であるといえる。ゆえに、結果補語が述語動詞の表す動作行為の動作主が存在する場所を意味指示する現象は「R (V agent-location)」と一般化できる。以上、3.1.8では結果補語が述語動詞の表す動作行為の動作主かあるいは受け手が存在する場所を意味指示する場合について説明した。

3.1.9 結果補語の意味指示対象が「述語動詞の表す動作行為の動作主かあるいは受け手の距離」の場合

3.1.9では結果補語が述語動詞の表す動作行為の動作主かあるいは受け手の距離の場合について分析する。

马、陆 (1997) によると、この種類の意味指示はさらに二つの小類に分けることができる。一つは、「A. 動作主かあるいは受け手の位置の移動した距離」で、もう一つは「B. 受け手の間の距離」である。この二つの小類について順に見て行く。

まず、Aの場合についてである。马、陆 (1997) では、結果補語が「動作主の位置の移動した距離」を意味指示する例として“他走远了 [彼は遠くへ歩いていった]”を挙げている。そして、それについて“他走远了”の補語“远 [遠い]”は意味上“走 [歩く]”の動作主“他 [彼]”の位置の移動した距離を説明しているのである」と指摘している。

VR構造“走远了”において、意味上の中心は結果補語“远”にある。よって、“远”が論理述語になる。論理述語はある個体についてそれが持っている属性を記述している。すなわち、論理述語になる“远”は「ある個体についてそれが遠いという属性を持っている」ことを表している。これは「YUAN (x)」のように表記できる。しかし、これは文ではない。これを文にするためには個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“他走远了”は「彼は遠くに歩いていった」という意味を表す文である。これは「彼が歩くことによって生じた距離 (distance) は遠くなった」と言い換えることができる。すなわち、それは「彼の移動によって生じた距離」とい

う個体に関して、それが「遠い」という属性を持っていることを記述している。よって、「彼の移動によって生じた距離」は個体変項に割り当てられる個体定項となる。個体定項になる「距離」は“走”という「移動動作」によって生じ、その動作を行うのは“他”である。このことを「ZOUagent-distance」を表記しよう。個体定項が割り当てられた述語論理式「YUAN (ZOUagent-distance)」は文である。同時にそれは、“他走远了”と同じ意味内容を表す。したがって、馬、陸(1997)が指摘する「“他走远了”の補語“远”は意味上“走”の動作主“他”の位置の移動した距離を説明している」という現象は、個体変項「x」に個体定項「ZOUagent-distance」を割り当てることと平行であるといえる。ゆえに、結果補語が述語動詞の表す動作行為の動作主の位置の移動した距離を意味指示するという現象は「R (V agent-distance)」と一般化できる。

以上はAの「動作主かあるいは受け手の位置の移動した距離」を結果補語が意味指示する場合についてであった。次に、Bの「受け手の間の距離」を結果補語が意味指示する場合について見る。

馬、陸(1997)では、結果補語が「受け手の間の距離」を意味指示する例として“秧插密了[苗はびっしり植えられている]”を挙げている。そして、それについて「“秧插密了”の補語“密[密である]”は意味上“插[植える]”の受け手“秧”の間の距離を説明する」と指摘している。

VR構造“插密了[びっしりと植わっている]”において、意味上の中心は結果補語“密”である。よって、結果補語“密”は論理述語になる。論理述語はある個体についてそれが持っている属性や関係を記述するものである。よって、論理述語になる“密”は「ある個体についてそれが密であるという属性を持つ」ことを表す。それは「MI (x)」のように表記できる。しかし、これは文ではない。これを文にするためには、個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。以下でどのような個体定項が割り当てられるかを見る。

“秧插密了”は「苗を植えて、植えられた苗と苗の間隔(interval)が密である」という意味の文である。すなわち、「植えられた苗の間隔」という個体についてそれが「密である」という属性を持っていることを表している。

よって、「植えられた苗の間隔」は個体変項「x」に割り当てられる個体定項となる。個体定項になる「間隔」は“挿”という動作の受け手“秧”の間の距離である。このことを「CHApatient-interval」と表記しよう。個体定項が割り当てられた述語論理式「Ml (CHApatient-interval)」は文である。同時にそれは、“秧插密了”と同じ意味内容を表す。したがって、馬、陸 (1997) が指摘する「“秧插密了”の補語“密”は意味上“挿”の受け手“秧”の間の距離を説明する」という現象は、個体変項「x」に個体定項「CHApatient-interval」を割り当てることとパラレルであるといえる。ゆえに、結果補語が述語動詞の表す動作行為の受け手の間の距離を意味指示するという現象は「R (Vpatient-interval)」と一般化できる。以上、3.1.9では結果補語が述語動詞の表す動作行為の動作主かあるいは受け手の距離を意味指示する場合について述べた。

3.1.10 結果補語の意味指示対象が「述語動詞の同源成分」の場合

3.1.10では、結果補語が述語動詞の同源成分を意味指示する場合について分析する。

馬、陸 (1997) によると、「同源成分」というのは、“焼火 [火を燃やす]”の“火 [火]”や“走路 [(道を) 歩く]”の“路 [道]”のようなものである。そして、馬、陸 (1997) では「“火烧旺了 [火は盛んに燃えている]”、“路都走平了 [道はすっかり踏みならされた]”の補語“旺 [盛んである]”と“平 [平らである]”は意味上それぞれ述語動詞“烧”と“走”の同源成分“火”と“路”を指示する」と指摘している。ここでは、説明の重複を避け“火烧旺了”について考える。

VR構造“烧旺了 [盛んに燃えている]”において、意味の重点は結果補語“旺”にある。よって、結果補語“旺”は論理述語となる。論理述語はある個体についてそれが持っている属性や関係を記述するものである。したがって、論理述語となる“旺”は「ある個体についてそれが盛んであるという属性を持つ」ことを表す。このことは「WANG (x)」と表記できる。しかし、それは真理値を持たない。すなわち、それは文ではない。それを文にするた

めには、「WANG (x)」の個体変項「x」に個体定項を割り当てればよい。

以下でどのような個体定項が割り当てられるのかを見る。

“火烧旺了”は「火は盛んに燃えている」という意味の文である。「火は盛んに燃えている」は「火が燃えて、燃えている火は盛んである」と言い換えることができる。とすると、それらは燃えている「火」という個体についてそれが「盛んである」という属性を持っていることを表す。よって、「火」は個体変項「x」に割り当てられる個体定項となる。個体定項として割り当てられる「火」は「燃える」の同源成分 (origin) である。このことを「SHAOorigin」と表記する。個体定項が割り当てられた述語論理式「WANG (SHAOorigin)」は文である。同時にそれは、“火烧旺了”と同じ意味内容を表す。したがって、(1997) 马、陆が指摘する「“火烧旺了”の補語“旺”は意味上述語動詞“烧”の同源成分“火”を指示する」という現象は、個体変項「x」に個体定項「SHAOorigin」を割り当てることと平行であるといえる。ゆえに、結果補語が述語動詞の表す動作行為の同源成分を意味指示するという現象は「R (Vorigin)」と一般化できる。以上、結果補語が述語動詞の同源成分を意味指示する場合について述べた。

4. おわりに

第三章では马、陆 (1997) の研究資料をもとに結果補語の意味指示という現象について述語論理を用いて分析をした。その結果、形容詞が結果補語のVR構造について、結果補語の意味指示という現象が「R (V…)」という一般的な形式によって記述された。これによって少なくとも次の二点が客観的に証明される。その第一はVR構造及びVR構文において、結果補語が意味の重点となるということである。これは結果補語が論理述語になるということから導き出される。たとえば、“她哭红了眼睛”の結果補語“红”が論理述語となり、「HONG (KUagent-part)」のように記される。第二は意味指示対象が必ず述語動詞と何らかのかかわりを持っているということである。これは個体定項に必ず「V」が表れることが論拠となる。たとえば、指示対象が述語動詞そのものを表す「R (V ϕ)」や述語動詞の動作主を表す「R (V

agent)」のようにである。

そして述語論理を用いた結果補語(形容詞)の意味分析において、最も重要であるのは結果補語の意味指示がVR構造文の成立と深くかかわっているという点である。これは次のようなことから結論づけられる。結果補語は述語論理において論理述語となる。述語論理式を文とするには、個体定項を割り当てる必要がある。これまでの考察から、結果補語の意味指示対象が個体定項として割り当てられた。ゆえに、結果補語の意味指示という現象は文の成立にとって必要な成分を指示することといえる。以上、本稿では述語論理を用いての意味分析をつうじて結果補語の意味指示がどのような機能を果たしているかについて述べた。

注釈

〔注1〕述語論理学では、「C」のような論理述語を単に「述語(predicates)」と呼ぶことがあるが、言語学上で用いられる「述語」との混同を避けて、本稿では「論理述語」と記すことにする。

〔注2〕述語論理学では、このほか「量化子(quantifier)」という概念も重要な役割を果たすが、本論文で用いる述語論理式には量化子を使用しないので、量化子についての説明は省略する。

〔注3〕述語論理学では個体定項を表すのには、a, b, c……などアルファベットの小文字(イタリック)を用いるのが通例であるが、本稿では便宜的に「LAI ϕ 」や「V ϕ 」のような表記をする。

〔注4〕ここでの「…すぎる」という意味は、語彙レベルで生じるものでなく“挖浅了”の構造全体から生じるものである。

参考文献

- 郡司隆男 阿部泰明 白井賢一郎 坂原茂 松本裕治, 1998, 『岩波講座言語の科学4 意味』, 岩波書店
- 公平珠躬 野家啓一訳, 1979, 『日常言語の論理学』, 産業図書
- (原著はAllwood, Jens S., Lars-Gunnar Andersson, and Osten Dahl, 1977,

Logic in Linguistics, Cambridge University Press.)

- 李临定著 宮田一郎訳, 1993, 『中国語文法概論』, pp.168-183, 光生館
- 刘月华/潘文娛/故wei1983, 《实用现代汉语语法》, pp.329-337, 外语教学与研究出版社
- 马真/陆俭明, 1997, 形容词作结果补语情况考察, 『橋本萬太郎記念中国語学論集』, pp.155-172, 内山書店
- 松村文芳, 1998, 「現代文法を考えるー属性と個体と意味特徴ー」, 『しにか』5月号, pp.69-76, 大修館書店
- 杉本孝司, 1998, 『日英語対照による英語学演習シリーズ5 意味論1ー形式意味論ー』, くろしお出版
- 徐烈炯, 1995, 《语义学》, 语文出版社